

本態性振戦に低侵襲治療

MRgFUS実施へ

北海道大野記念

西区の北海道大野記念病院(齋藤孝次理事長、大野猛三院長・276床)は、本態性振戦の治療に従来の手術よりも低侵襲なMRgFUS(MRガイド下集束超音波治療器)を導入、30日から本格的に実施する。道内2施設目、国内では9施設目となる。

本態性振戦は、65歳以上の10〜20人に1人が発症するといわれる。軽度の場合には薬で症状を抑えられるが、生活に支障を来すほど重く、薬で十分な効果が出なければ、穿

頭手術で視床腹中間(ViM)核を凝固して症状の緩和を図る。MRgFUSは、患者の頭に装着したヘルメット型装置を使い、頭蓋外

脳深部の治療部位に集束させ、熱焼灼する。各種準備等も含めて3〜4時間程度で、穿頭しないため、患者の身体的な負担は小さい。

3テスラMRIで撮影しながら、リアルタイムで正確な治療部位の位置と、温度計測によって熱焼灼の状態を確認しながら治療を進めるので、安全性が高い。

超音波の照射量は細かく調整でき、覚醒下にある患者の改善状況をみながら、他の正常な部位への影響を極力抑えて、最小限のダメージで治療。照射中に痛みやしびれ等が生じることはあるが、重篤な副作用や後遺症はほとんどなく、2〜3日の入院で済む。

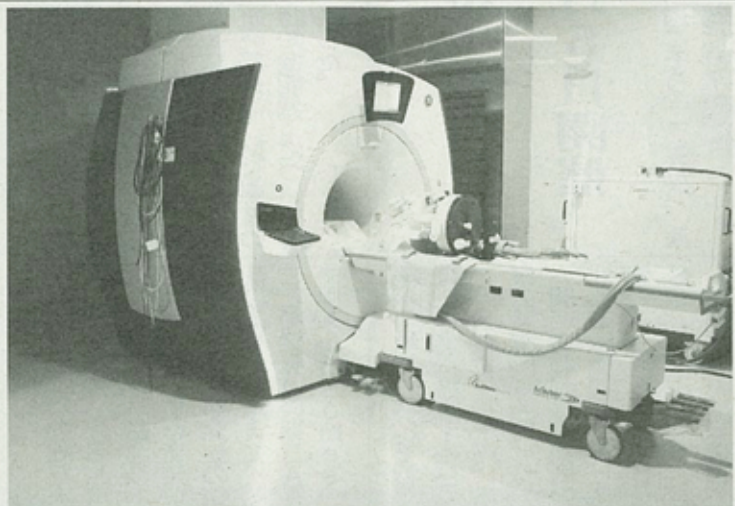
一方、超音波が頭蓋骨を透過しにくいケースや、長時間安静を保てない患者などは適応外となる。

寺川雄三脳神経外科医

長が担当し、三國信啓礼
医大脳神経外科科学講座教
授の協力を得て、当面は
MRgFUS治療のハイ
オニアである、東京女子
医大の平孝臣教授立ち合
いのもと治療を行ってい
く。

寺川院長は「本態性振
戦のため、日常生活に苦
労している人は少なく
ない。手術だからと治療を
ためらっている患者の選
択肢になれば」と話す。

Hospital & Clinic



MRgFUS装置